論　文

保育の音環境に対する認識の研究

[1]埋　橋　玲　子　　[2]岩　渕　善　美
[1]同志社女子大学・現代社会学部・現代こども学科・教授（2021年３月退職）
[2]平安女学院大学・短期大学部・保育科・教授

A Study on professional's recognition of sound environment in early years' classrooms

[1]UZUHASHI Reiko　　[2]IWABUCHI Yoshimi
[1]Department of Childhood Studies, Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor
[2]Department of Early Childhood Education, Heian Jogakuin (St. Agnes') College, Professor

Abstract

The research question of this study is how preschool teachers recognize the sound environment of their classrooms. A questionnaire survey was compleated, answers were categorized, and free descriptions were analyzed by quantitative text analysis. The results show that there are many challenging issues regarding the sound environment of the classrooms and that teachers make efforts to control of the volume of voices and set up a good layout of the room to give children a relax atmosphere. Through the analysis of free descriptions of classroom teachers, head teachers, and ECERS assessors, it was found that they commonly recognize that the relationship of children, education and care, and voice is important. However there are differences in their opinions, dependeding on their positions.

Keywords: early childhood classroom environment, sound environment, preschool teachers recognition, quantitative text analysis

要旨

本研究では、保育室内の音環境について、保育者等がどのような認識を持っているのかを把握することを目的とした質問紙調査を実施し、所定項目への回答の集計結果と自由記述内容計量テキスト分析結果を照合した。調査対象となったクラス担任、施設長・主任等、調査員別の自由記述内容の解析から、３者は共通して「子ども・保育・声」を重視し、保育室内の音環境には課題があるという認識は共通しているが、立場に応じて音環境についての認識には相違があることがわかった。保育を実際に担当する保育者についていえば、子どもに言葉をかけるときの声量、落ち着く環境を整えるなどの観点から音環境についての配慮を心がけていることが明らかになった。

キーワード：保育環境、音環境、保育者の認識、計量テキスト分析

1　はじめに

近年、わが国において乳幼児の発達と音環境の関わりの重要性が指摘されるようになっている（野口他 2015・志村他 2016）。

幼児教育施設における現状については、上野らなどによる12カ所の保育施設の音環境の現状と建築音響性能面からの研究がある（上野他 2017）。日本建築学会は、2020年に乳幼児の保育室に関する規準を示し、保育室における音響性能について、活動時の室内騒音レベルを40dB、午睡時の室内騒音レベルは35dBの推奨値を示している[1)]。

宮塚らは、保育室に吸音材の設置前後に、保育者に対してアンケート及びヒアリングを行い、空間の印象、子ども・保育者の様子など、吸音材設置による効果と運用上の工夫による効果を明らかにしている（宮塚他 2018）。

保育者の聴力の観点からの音環境については、志村らは、１日の保育終了直後の５名の保育者に対して、500Hzの周波数帯の聴力検査を実施して、５名とも聴力レベルは10dBから15dB内外低下していることを明らかにした。この結果により、志村らは保育者の聴力保護の必要性を述べ、保育活動での保育者の発話音声のあり方や幼児をとりまく音環境について再考することを提案している（志村 2014a・2014b）。

では、保育者自身は保育の音環境についてどのような認識をしているのだろうか。その認識は保育者以外の立場の人たちと共有されるものなのだろうか。本研究では、このことを明らかにするために、保育中の「音」に関してどのような認識がなされているのかを把握することを目的として保育者等に対しアンケート調査を実施し検討を行った。その際、自由記述の内容については計量テキスト分析を行った。

2　方法

2.1　概要

本研究の対象となったのは、保育環境評価スケール（ECERS）[2)]を用いて、保育の質の評価が行われたクラスで保育を担当する保育者（以下クラス担任）、当該園の施設長・主任等、及びECERSを用いて質評価を行った者（以下、調査員）である。調査日は、2019年５月から６月で、保育の質評価の対象となった近畿圏の幼稚園・保育所・認定こども園の４歳児クラスで、これら３者に調査実施当日に調査票を渡し、後日無記名で返送してもらった。調査票の内容は、保育の音環境についての質問18項目（４件法、Ｑ６とＱ８は５件法）、自由記述、属性である（文末資料）。調査数は、配布票数138票、回収票数138票、有効回答票121票、有効回答率87％であった。自由記述の回答があったのは、うち44票である。

2.2　倫理的配慮

質問紙調査は、事前に口頭による研究の説明を行い、無記名で実施し、回収により同意を得たと判断した。統計的に処理を行い個人の特定はしていない。

3　質問項目の回答結果と考察

3.1　回答者の属性

表１に調査対象の概要を示す。回答者の属性の人数と割合は、クラス担任が40人、33.1％、施設長・主任等が32人、26.4％、調査員が49人、40.5％であった。保育の担当クラスの割合は、３歳０％、４歳96.7％、５歳０％、異年齢混合（３・４・５歳）3.3％であった。10人以下は０％、11～20人は24.0％、21～30人は72.7％、31人以上は1.7％、未記入1.7％であった。部屋の広さについては、通常の広さの保育室が98％、仕切りなどを取り払ったオープンスペースが２％であった。

3.2　質問18項目（Ｑ５～Ｑ22）の回答結果

有効回答票121票の質問18項目（Ｑ５～Ｑ22）への回答結果は、調査対象園全体として、以下のようにまとめられる。（　）内は回答の実数である。

子どもたちの状況としては、全体的な印象で

表１　調査対象　n＝121

	属性	N	%
回答者	クラス担任	40	33.1
	施設長・主任等	32	26.4
	調査員	49	40.5
クラス	３歳	0	0
	４歳	117	96.7
	５歳	0	0
	異年齢混合（３・４・５歳）	4	3.3
クラス規模	10人以下	0	0
	11～20人	29	24
	21～30人	88	72.7
	31人以上	2	1.7
	未回答	2	1.7

は「とても元気（60）」あるいは「元気（61）」【Ｑ５】であり、合わせると121園の100％である。「とても楽しそう（52）」「楽しそう（68）」【Ｑ７】を合わせると120園でほぼ100％である。子どもたちが大声を出すのは「常に（６）」「ときどき(93)」を合わせるとおよそ82％であり「大声を出すことはあまりない（19）」「大声を出すことはない（３）」よりはるかに多い【Q15】。子どもたち自身は室内の音に対して「うるさい」という声をあげることは「ない（55）」のは45.5％であり、「ごくたまに上がる（40）」「ときどき上がる（25）」を合わせると53.7％となる【Q17】。

保育室の外部からの音の侵入に関して、園外である近隣の音については「騒々しくない(60)」「あまり騒々しくない（36）」が合わせておよそ79.3％【Q11】であり、その受け取り方としては「気にならない（56）」「あまり気にならない（27）」が合わせて66.1％である【Q12】。この設問に関しては珍しく無回答が19.0％ある。次に園内から発生する隣室などからの音については「全く聞こえない（42）」「ほとんど聞こえない（33）」を合わせると53.7％であり【Q18】、その受け止めとしては「全く気にならない(50)」「あまり気にならない（43）」を合わせると76％である【Q19】。このQ19に対しても無回答が14.0％ある。園内放送については「ない(38)」「ほとんどない（63）」を合わせると83.5％である【Q21】。

自由遊びの時に自分のクラスで発生する音（物音、声）については「とても響く（８）」「響く（68）」を合わせると62.8％である【Ｑ６】。集団活動で楽器の音や全員が歌うなどして最も音のボリュームが出やすいと思われる音楽活動については、「かなり大きい（５）」「大きい（49）」を合わせると44.6％であるが音楽活動自体がないクラスが全体の10.0％ある【Ｑ８】。自分のクラスが発生する音＝室内からの音漏れに関しては「気にしていない（42）」「あまり気にしない（46）」を合わせると72.7％となる。

保育者の発声等に注目すると、子どもたちを静かにさせるために「シーッ」という仕草をするかどうかについては指を立てて口に当てるかについて「よくする（２）」「たまにしている(35)」は合わせて30.5％である【Q10】。保育者が声を張り上げているかどうかについて「常に張り上げている（５）」「時々張り上げる（60）」を合わせると53.7％である【Q13】。子どもに呼びかけるのに手をメガホンのようにすることは「ほとんどしない（51）」「しない（50）」合わせて83.5％である【Q16】。子どもを従わせるのに運動遊びの場面以外でホイッスルや拡声器を用いるかどうかについては「あまり使われていない（16）」「使われていない（97）」が合わせて93.4％である。

保育者の言葉が子どもに伝わっているかどうかについて尋ねると「よく伝わっている（25）」「おおむね伝わっている（91）」は合わせて95.9％である【Q14】。具体的な音環境の設問への回答の後に、子どもの姿の全体的な印象を尋ねると、「落ち着いている（26）」「やや落ち着いている（61）」を合わせると72.0％、「少し落ち着きがない（30）」「とても落ち着きがない（４）」を合わせると28.1％である【Q22】。

3.3　質問18項目（Ｑ５～Q22）に対する回答結果の考察

Ｑ５とＱ７の回答よりクラスの子どもたちの様子については「元気で楽しそう」であることは回答者によって共有された認識であるとわかる。このことはＱ６で示された「物音が響く」、Q15で示された「子どもが大声を出す」という状況とパラレルである。Q13に見られるように、その中で保育者の約半数は「声を張り上げている」。反面、全体的に見ると子どもを静かにさせようとする身振り、道具の使用については控えめであることがうかがわれる。子ども自身が音量の大きさを不快に感じてその不快感を「うるさい」と表現する行動が約半数により観察される。

保育者と子どものコミュニケーションについては、ほぼ「保育者の言葉が子どもに伝わっている」と認識されている一方で「落ち着きがない」と感じられる子どもが10人のうち３人弱いることは、保育者の思いが伝わることと、子どもの心理的な安定とがつながりにくい状況があることがうかがわれる。

調査対象園については外部からの騒音は問題になるレベルではない。保育室内で発生する音、建物内で発生する音の音量が小さいとは言い難い状況ではあるが、相互に気にせず問題として受け止めないという傾向が見て取れる。

3.4　回答者の立場による比較

調査票の各項目について、クラス担任、施設長・主任等、調査員という回答者の立場による差異があるのかについて調べた。立場を独立変数、Q10、Q17、Q18、Q21の回答（４件法）を従属変数として一要因分散分析を行った結果を表２に示す。分析は、統計解析ソフトであるIBM SPSS Statistics V27を用いた。数値が低いほど各項目の答えに肯定的であることを示している。

これから、「指を立てて口に当てるか」、「隣室から音は聞こえるか」および「園内放送は入るか」については、調査員の値が最も高く有意差があり、クラス担任、施設長・主任等では有意差がみられなかった。

「子どもたちから“うるさい”という声があがるか」については、クラス担任の値が最も低く有意差があり、施設長・主任等、調査員では有意差がみられなかった。これらの結果から、「子どもたちから“うるさい”という声があがるか」では、クラス担任が施設長・主任等、調査員よりも高い意識を持っていることがわかった。

一方、「指を立てて口に当てるか」、「隣室から音は聞こえるか」および「園内放送は入るか」では、調査員がクラス担任と施設長・主任等よりも意識が低いことが明らかになった。

表２　各質問項目における役職による平均値・SD（一要因分散分析）

	クラス担任 (N＝40)	施設長・主任等 (N＝32)	調査員 (N＝49)	分散分析	多重比較（Tukey 法）
Q10. 指を立てて口に当てるか	2.60(0.81)	2.88(0.75)	3.35(0.69)	F (2, 118)＝11.339 P＜.001	調査員＞施設長・主任等、クラス担任
Q17. 子どもたちから「うるさい」という声があがるか	2.85(0.77)	3.31(0.74)	3.49(0.77)	F (2, 118)＝8.044 P＜.001	調査員、施設長・主任等＞クラス担任
Q18. 隣室から音は、聞こえるか	2.56(0.92)	2.65(0.84)	3.33(0.92)	F (2, 118)＝9.279 P＜.001	調査員＞施設長・主任等、クラス担任
Q21. 園内放送は入るか	2.83(0.50)	2.94(0.50)	3.55(0.71)	F (2, 118)＝19.138 P＜.001	調査員＞施設長・主任等、クラス担任

4．自由記述の回答結果と考察

4.1　内容のテキスト分析

得られた自由記述の分析については、樋口が開発した計量テキスト分析を行うためのフリーソフト KH Coder（ver.3b02d）を用いた。計量テキスト分析とは、テキストデータで使用されている品詞、単語の出現回数、単語間の関係などに注目して統計的手法により計量的に解析を行う方法である。KH Coder は、テキストデータについて統計的に処理を行うソフトであり、2021年２月現在で４千を超える研究活用事例がある。

回答者の自由記述には、同じ意味で様々な表現方法があり、自由記述を解析していくために、入力時に誤字・脱字の修正と表記の統一を行った。表記の統一は、「子ども」、「一人ひとり」および「保育者」である。

表記の統一後、KH Coder を用いて分析を行い、出現パターンの似通った語、共起の強い語を線で結んでネットワークの可視化を行った。ネットワーク図は、語（node）と線（edge）で構成され、共起の程度が強い語を線で結ぶことで構成され、出現頻度が多い語ほど大きい円で描画される。テキストの分析では、回答者の記述の原文を『　』内に記載した。

4.2　回答者の属性

回答者44名のうち、クラス担任が36名、施設長・主任等が３名、調査員が５名であった。クラスの規模は、こども数11～20人は８クラス、21～30人は36クラスであった。

4.3　抽出語分析

総抽出語数は、1,869語、異なり語数が426語であり、分析に使用される語として816語、異

表３　抽出語と出現回数（３回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	58	友だち	7	園	3
保育	38	活動	6	音楽	3
自分	17	気持ち	6	過ごせる	3
声	15	言葉	6	関わる	3
楽しい	14	認める	6	寄り添う	3
思う	11	気	5	好き	3
大切	10	話	5	姿	3
遊び	10	クラス	4	時期	3
育てる	9	音	4	自ら	3
考える	9	楽しむ	4	自己	3
子	9	肯定	4	自身	3
思い	9	出せる	4	主体性	3
保育者	9	多い	4	心がける	3
一人ひとり	8	大人	4	接する	3
環境	8	遊ぶ	4	前	3
出す	8	落ち着く	4	伝える	3
感じる	7	意欲	3	明日	3
主体	7	一緒	3	力	3
生活	7	運動会	3		

なり語数322語が抽出された。これらのうち、出現回数が３以上の頻出語と出現回数を表３に示す。総抽出語数の中で多く出現している語について出現回数の順に並べたものである。「子ども」が58回と最も多く出現しており、次いで「保育」が38回、「自分」が17回、「声」が15回の出現回数であった。

4.4　共起ネットワークの分析

ａ．全体像

どのような語と語の結びつきが強いかについて、図１のように共起ネットワーク図に示した。共起ネットワーク図では、出現頻度が多い語ほど大きい円で、強い共起関係ほど太い線で描画される。線の数値は、類似性測度を示すJaccard 係数であり、０から１までの値をとり、１に近づくほど関連が強いことを示す。以下に示す、Ａ～Ｆの６つのグループに分類された。

① Ａグループでは、最も出現頻度の多い語である「子ども」を含み中心から下に布置され、「子ども」「保育」「楽しい」「感じる」「子」「保育者」「話」「伝える」「思い」などの15語の関連性が示されているため《保育観》を読み取ることができる。「自分」は「思い」、「子ども」、「考える」、「育てる」と最も数多く４つの語と共起していることがわかった。記述を確認すると『先生に言われて〇〇するのではなく、子どもたちが自ら気づき、それを友だちに伝えることのできるクラス作り』という記述があり、子どもたちが自ら気づくことや友だちに伝えていくことのできるクラス作りを保育者が大切にしていることがわかる。また、「自分」「考える」「育てる」の共起された語では、『大声で指示を出さなくても自分なりに考えて行動できる子を育てたい』や『友だちのことを認め受け入れられることや、子どもが“やってみたい”と自分で考えたりしながら取り組んでいけるように日々の保育を考えたいと思っています』などの記述がみられ、子どもが自分で考えて行動ができるようになることを目指して保育に取り組んでいる様子が推察できる。

② Ｂグループでは、「思う」「気持ち」「自己」「自身」「楽しむ」「寄り添う」などの８語の語の関連性が示されているため《子どもへの配慮》を読み取ることができる。「思う」「気持ち」「自己」「自身」「楽しむ」「寄り添う」の共起された語では、『子ども一人ひとりの気持ちに寄り添ったり、子どもたちの良いところや得意なところを認め、自己肯定感を育むことができるような』や『子どもの気持ちに寄り添いながら楽しく笑顔あふれる保育』の記述が確認された。「言葉」と「心がける」の共起された語では、『リラックスして保育所生活を送るようにやさしい言葉がけや、子どもの目線に合わせて接することを心がけています』という記述や『できるだけ肯定的な言葉で話すように心がける』の記述がみられ、子どもの気持ちに寄り添い、保育を行っていく保育者の子どもへの配慮が示唆された。

③ Ｃグループでは、「声」「多い」「出す」「環境」「音」「活動」など７語の語の関連性が示されているため《保育活動と音の関わり》を読み取ることができる。「環境」と「音」の語の共起では、『音の環境は、落ち着き、集中、リラックスにも繋がるので、隣のクラスとの活動の時間差など』という記述がみられ、保育を行ううえで隣のクラスの活動に注目することや音環境について子どもの落ち着きやリラックスにも繋がることを認識していることがわかった。「声」と「多い」の共起された語については、『一人担任のため、声を出すことが多いと思う』という記述がみられ、担任として、声を多く出していることの認識を持っていることが考えられる。また、「声」についての記述では、『年度はじめ４月５月。喉が痛くなり、声がかすれる』や『週末に声が枯れることがある』および『ダンスの練習などで、遠

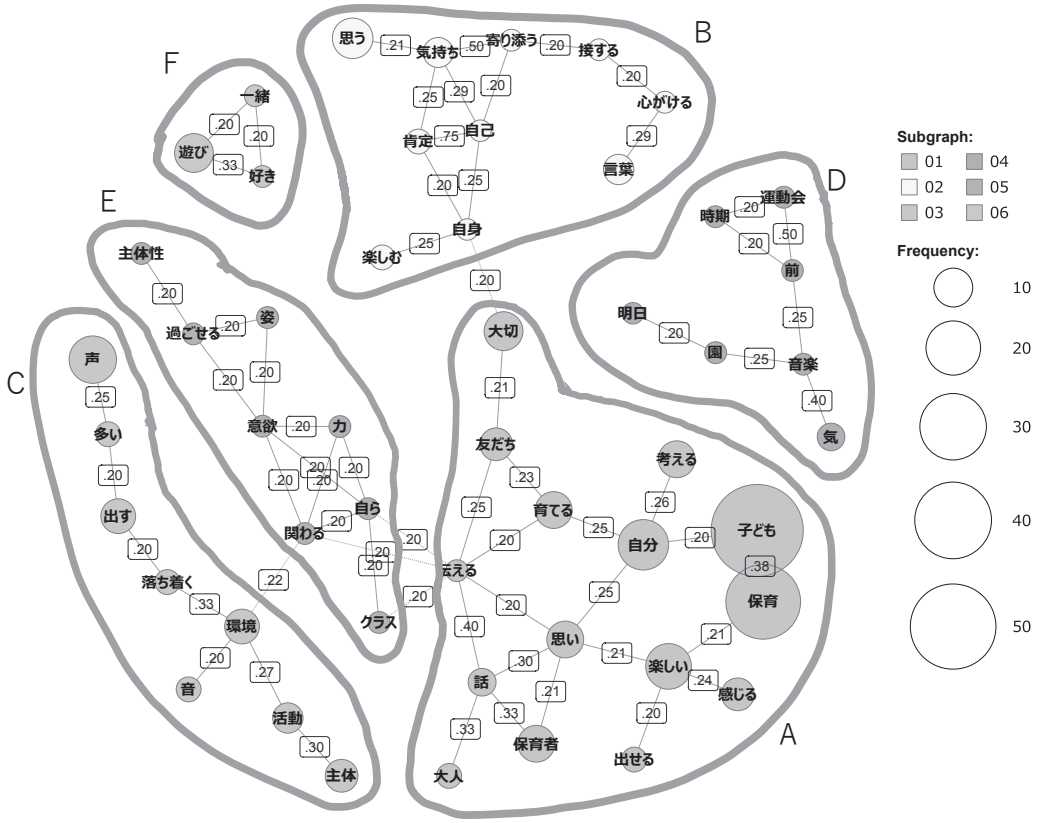

図１　共起ネットワーク図

くの子まで聞こえるようにと大きな声を出すことが続くと声が出にくくなることがあります』の記述があり、保育場面で声を出すことが身体への悪影響となることが確認され、大きな声を出さないような保育方法の工夫の必要性が明らかになった。一方、『その場の状況に合う声（大きい声、ささやく声等）は気を付けています』の記述から、保育の場において、その場の状況に応じて効果的な声の出し方を意識していることがうかがえた。

④　Ｄグループでは、「時期」「運動会」「音楽」「園」などの７語の語の関連性が示されているため《音楽への意識》を読み取ることができる。「音楽」と「気」の共起された語については、これは楽曲をかけて音を発生させて保育を行うことに必要性があるか、子どもに影響しているかなど、音楽がもつ意味や意義を意識していることがうかがえる。別の観点からは『近隣がマンションのため、園庭で音楽をかけるときは音量を気にしている』の記述が確認でき、運動会や園庭における遊びでの園から発生する音の音量に関して近隣に配慮していることが推察できる。

⑤　Ｅグループでは、「主体性」「意欲」「関わる」「自ら」「力」など８語の語の関連性が示されているため《保育教諭の思い》を読み

取ることができる。「主体性」「意欲」「関わる」「自ら」「力」の共起された語では、『子どもが主体となる保育』や『子どもたちの良いところや得意なところを認め、自己肯定感を育むことができるような保育をしたいと思っています。』の記述がみられ、保育者としての子どもへ接するための保育観がうかがえた。

⑥　Ｆグループでは、「遊び」「一緒」「好き」の語の関連性が示されているため《遊び方》を読み取ることができる。「遊び」「一緒」「好き」の共起された語では、『好きな遊びの時間には、子どもたちと一緒に遊んで楽しさを共有する』や『子どもが落ち着いて、自分の好きな遊びが楽しめる』という記述がみられ、保育者として子どもと一緒に楽しく遊んでそのことを共有していくことの大切さや子どもが自分の好きな遊びが楽しめるように落ち着いた環境を提供できることを重視する認識があることが推察できた。

ｂ．属性別

外部変数として「クラス担任」「施設長・主任等」「調査員」の属性を用いた共起ネットワーク図を図２に示す。

外部変数の「クラス担任」「施設長・主任等」「調査員」の３つからは、「子ども」、「保育」、「声」について共通の共起が確認できた。自由記述をみると『子ども一人ひとりに合わせた声掛けや保育ができるように気をつけている』、『一人ひとりを大切にする保育。主体的な保育。言葉を丁寧に手渡す保育』などが確認でき、「クラス担任」「施設長・主任等」「調査員」ともに回答者は保育者であり、音環境において、保育をするときの子どもに対する声のかけ方、声の出し方などを意識していることが示唆された。

外部変数の「クラス担任」からは、「生活」、「育てる」、「友だち」、「言葉」、「認める」、「話」、「思い」などの語と共起がみられ、他の２つの外部変数の「施設長・主任等」と「調査員」との共通の語を含めると最も多くの語との共起が布置された。自由記述では『子どもたちの意見や思いを遊びや生活の中で取り入れていきたい』、『子どもたちが主体となって、生活、活動、遊びに関わっていけるような保育・環境』が確認でき、クラスの担任としてクラス運営に重きを置いて、保育の音環境を意識していると考えられる。

外部変数の「施設長・主任等」からは、「子」、「運動会」、「主体性」、「園」、「明日」、「大人」などの連結された語群をみると、施設長・主任等という立場から、園の運営や園の理想及び保育者像を意識していることが推察される。自由記述では『子どもの主体性を育てる保育』『子どもたち同士や大人と子ども、また保護者などとつながる保育』が確認できた。

外部変数の「調査員」からは、「音」、「活動」、「意欲」、「クラス」、「寄り添う」、「関わる」、「接する」などの語と共起が確認できた。自由記述では、『子どもたちがありのままの姿を出し、楽しく安定した環境の中で落ち着いて過ごせる保育』『子どもが自ら考え行動する力、意欲的で自分に自信をもてるように関わり、常に子どもの心の変化や心情に気付ける』がみられ、調査員の立場からクラスの活動の全体をみて、意欲や関わり方、接する様子、そこで発生する音について意識していることが考えられる。

外部変数の「クラス担任」と「施設長・主任等」では、「楽しい」、「一人ひとり」、「大切」、「感じる」、「出す」、「遊び」の語に共通の共起が布置された。自由記述では『子どもたちが楽しく過ごし、一人ひとりが自分の思いを出せる保育』『子どもたちがのびのびと過ごせるよう主体性を大切にする』という記述がみられ、両者が子どもの自己表出に注目していることが見られた。

外部変数の「クラス担任」と「調査員」では、「環境」、「考える」、「自分」、「主体」の語に共通の共起がみられた。自由記述では、『教師主導型ではなく、子どもたちが自分で考えたり工夫したり協力したりしながら活動できる保育』『子どもたち主体。自分たちで考え、遊びこんでいく、発想や発見を大切にする保育』『音環

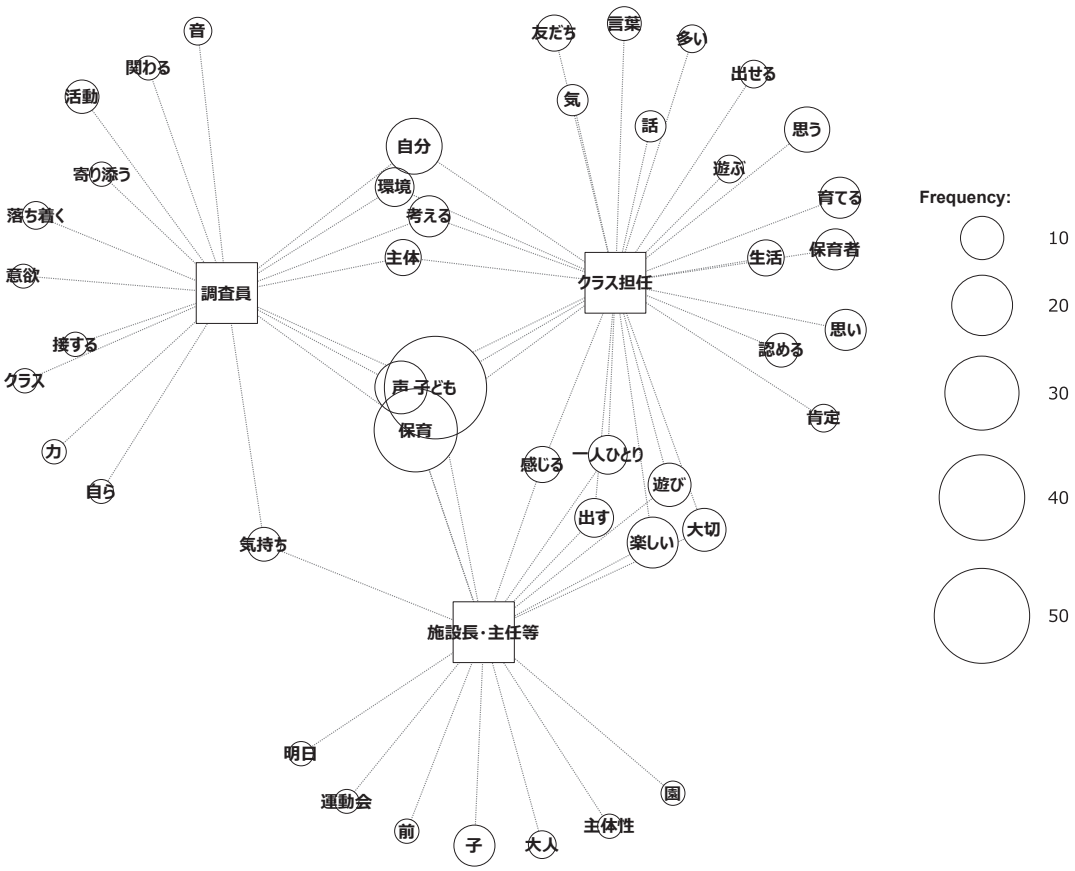

図２　属性別の共起ネットワーク図

境に関わる面では自分の思いを伝えるだけではなく友だちや保育教諭の話も大切に聞ける子』という記述が確認でき、「クラス担任」と「調査員」は、友だちや保育者の話も大切に聞くことができる保育をしていきたいという、保育場面での相互関係への注目が見られる。

5　おわりに

調査対象園では、建物の外からの騒音の影響はほとんどなく、自園内での音の発生について考察の対象とすることができた。保育という営みがもたらす音の発生が保育環境に与える影響は一つの課題と認識されていることが示された。

室内における保育活動が必然的に生み出す音についてはどうであろうか。子どもの「元気さ」「楽しさ」は「うるささ」という不快感と並行しており、そのことに対して「子どもの主体性」という保育の中で大切にされている音の観点から保育活動における音の発生をコントロールする必要性を感じたり、保育者自身が声量を意識していることがうかがわれた。

このように、保育と音のつながりが認識されていることが明らかになった。今後の課題は、音について保育の質、保育者の発声や発話も含め具体的な保育活動のあり方を探究していくことであろう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費番号18K02467の一環として実施されました。調査にご協力下さいました各園・所の皆様方、またご尽力下さいました方々に心より御礼申し上げます。

注

1）『日本建築学会環境基準　AIJES-S0001-2020 学校施設の音環境保全基準・設計指針』　日本建築学会、2020

2）『新・保育環境評価スケール①３歳以上』　テルマ ハームス・リチャード M. クリフォード・デビィ クレア著、埋橋玲子訳、法律文化社、2016

参考文献

宮塚健、上野佳奈子（2018）「保育室の音環境改善手法に関する現場実験―吸音材の設置と運用面の対策の効果―」、『日本建築学会技術報告集』24(56)、233-236

野口紗生、小西雅（2015）「子ども・保育者とあそび空間とのかかわりに着目した自由保育場面の音環境調査」、『日本建築学会計画系論文集』80(718)、2771-2779

志村洋子、藤井弘義、奥泉敦司、甲斐正夫、汐見稔幸（2014a）「保育室内の音環境を考える(2)：音環境が聴力に及ぼす影響」、『埼玉大学紀要』63(1)、59-74

志村洋子、佐藤大子、金子亜由美、松延愛美、小谷宜路（2014b）「幼児の聴力と保育空間の音環境に関する研究」、『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』13、71-76

志村洋子（2016）「保育活動と保育室内の音環境：音声コミュニケーションを育む空間をめざして(〈小特集〉子どものための音環境)」、『日本音響学会誌』72(3)、144-151

上野佳奈子、宮塚健、野口紗生、船場ひさお、倉斗綾子「音環境に着目した保育施設の実態調査」、『日本建築学会環境系論文集』82(732)、87-95、2017

資料1

アンケートへのご協力ありがとうございます。
この調査は保育の音環境について現状をつかむためのものです。調査結果は、保育の音環境向上に向けての研究と実践のために活用させていただきます。

◎ 記入者の番号を○で囲んでください。　①　1　クラス担任　2　施設長・主任等　3　調査員
〔調査員名　　〕

◎調査を行なったクラスについて当てはまるものの番号を○で囲んでください。

②・年齢　1　3歳　2　4歳　3　5歳　4　異年齢混合（3・4・5歳）
③・出席人数　1　10人以下　2　11～20人　3　21～30人　4　31人以上
④・部屋の広さ　1　通常の広さの保育室　2　仕切りなどを取り払ったオープンスペース

◎調査を行なった当日午前中の、室内（保育室、遊戯室等）保育での声や物音の感じについて、感じたままにお答えください。あなたの感じに最も近いものの数字を○で囲んでください。

◆子どもたちは全体的に
⑤　1 とても元気　2 元気　3　あまり元気がない　4　元気がない

◆自由遊びの時に声や物音が
⑥　1　とても響く　2　響く　3　あまり響かない　4　響かない
5　自由遊びの時間がない、またはほとんどない。

◆子どもたちの様子は
⑦　1 とても楽しそう　2　楽しそう　3　あまり楽しそうでない　4　楽しそうではない

◆音楽やリズム活動の時の音が
⑧　1　かなり大きい　2　大きい　3　あまり大きくない　4　大きくない
5　活動がない

◆運動遊び以外の時にホイッスル、拡声器などが
⑨　1　常に使われている　2 時々使われている　3 あまり使われていない　4 使われていない

◆保育者は子どもたちを静かにさせようと「シーッ」と指を立てて口に当てますか。
⑩　1　よくしている　2　たまにしている　3　ほとんどしない　4 しない

◆外から聞こえてくる近隣の音は
⑪　1 常に騒々しい　2 ときどき騒々しい　3 あまり騒々しくない　4 騒々しくない
⑫　1 とても気になる　2 少し気になる　3 あまり気にならない　4 気にならない

◆保育者は声を
⑬　1　常に張り上げている　2 ときどき張り上げる　3 あまり張り上げない　4 張り上げない

◆保育者の言葉が子どもに
⑭　1　よく伝わっている　2　おおむね伝わっている　3　あまり伝わっていない
4　ほとんど伝わっていない

◆子どもたちは
⑮　1　常に大声を出している　2　ときどき大声を出す　3 大声を出すことはあまりない
4　大声を出すことはない

◆保育者は手をメガホンのようにして大声を出しますか
⑯　1　よくしている　2　たまにしている　3　ほとんどしない　4　しない

◆子どもたちから

⑰　1　「うるさい」という声がよく上がる　2　「うるさい」という声がときどき上がる
3　ごくたまに「うるさい」という声が上がる　4　「うるさい」という声は上がらない

◆隣室からの声や音は

⑱　1　よく聴こえる　2　少し聴こえる　3　あまり聴こえない　4　聴こえない

⑲　1　とても気になる　2　少し気になる　3　あまり気にならない　4　気にならない

◆保育者が、保育中の屋内の声や物音の洩れについて

⑳　1　いつも気にして窓を閉めたりする　2　ときどき気にしている
3　あまり気にしていない　4　気にしていない

◆園内放送は

㉑　1　しょっちゅう入る　2　時々入る　3　めったに入らない　4　ない

◆子どもたちは全体的に

㉒　1　落ち着きがある　2　やや落ち着きがある　3　少し落ち着きがない　4　落ち着きがない

◎先生ご自身のことについてお尋ねします（クラス担任の先生のみお答えください）。

◆大声を

㉓　1　いつも出す　2　ときどき出す　3　あまり出さない　4　出さない

◆耳に異常・違和感を感じることが

㉔　1　しょっちゅうある　2　たまにある　3　ごくたまにある　4　ない

◆喉が疲れて声が出なくなることが

㉕　1　しょっちゅうある　2　たまにある　3　ごくたまにある　4　ない

＊声が出なくなることがあるとお答えの方、よろしければ具体的な様子・時期などをご記入ください。

（　　）

＊自園の音環境、防音壁・吸音材の設置状況、音に関する保育活動など、取り組みや気になる点がおありでしたら下欄に自由にご記入ください。

◆自分なりの「目指す保育」がありますか。

㉖　1　明確にある　2　なんとなくある　3　あまりない　4　ない

＊１・２とお答えの方、それはどのようなものか、下欄に自由にご記入ください。

以上です。ありがとうございました。

○本アンケートや研究に関するお問い合わせは、下記までお願い致します。

埋橋玲子/同志社女子大学　E-mail: ruzuhash@dwc.doshisha.ac.jp